

ワシントン DC 滞在記

byユキーナ富塚サントス

1	夜間飛行	3
1.1	Not too bad	3
1.2	ブラック・シンポジウム	5
1.3	オライオン	8
2	スミソニアン	10
2.1	損する人がいない訳	10
2.2	フィンセントのプロヴァンス	14
2.3	ルノアール	16
2.4	アメリカ人が信じるもの	17
3	DC と似ている日本の都市	18
3.1	遠くで汽笛を聞きながら	19
4	DC 名物	21
4.1	プリティインピンク	21
4.2	フォレスト・ガンブ	23
4.3	アメリカがアメリカだったころのアメリカを撮ろう	24
5	DC で考えた	25
5.1	逃避行	26
5.2	実務とグレード	27
5.3	男が女を愛する時	29
5.4	トラビアータ 道を踏み外した女	31
5.5	安井夫人	33
6	ペンシルバニア 秋が目にしみる	35

1 夜間飛行

1.1 Not too bad

神様は、肌の黒い人たちに、不幸な歴史と引きかえに、何色でもひきたたせてしまう美しい肌と均整のとれた肉体を与えた・・・彼らを見ていると、そんな気がしてならない。

何かの文章の盗作ではない。以前自分が書いた文章である。4年ほど前、台湾に出張命令がでた。ある研修に参加するため、このセミナーには中南米、アフリカからの参加者も多かった。このインターナショナルな海外出張記録に残したフレーズである。

私は今、しみじみと、自分が書いたこの言葉は全く言いえて妙だなと思っている。典型的なアフリカン・アメリカンのソニア・ロビンソンが運転する車の助手席に座り、逃げるようにイサカを脱出し、私たちはワシントンを目指している。彼を横目で見ながら、私は自分が書いたかつてのこのフレーズを思い出している。

長い足を無理して折り曲げ、オートマのブレーキを踏んでいる。ソニアは決して長身ではない。おそらく170ちょっとだろう。でも、この日本車の運転席で足の長さを持て余してしまうのは、そのプロポーションの良さゆえだと思う。

褐色の肌に、グレーのTシャツ、学校のロゴが入った黒ベストを着ていても、ダサくならないのはその胸板と、「腕の太さ」ゆえだと思う。黒にあわせるのはジーンズ、これはセオリーであるが、ははあ、やはり、腰周りがだぶついている。典型的な太目のアメリカ人に合わせて画一的に作られているジーパンは黒人がはくと、どうしてもイマイチになる。おそらく彼らにはアルマーニか、ベルサーチあたりのGパンをはいてもらおうと、デザイナーが泣いて喜ぶほどのバランスとラインを見せるのだろう。

真夏の熱帯、台湾で、肌の黒いクラスメートはほとんど毎日Tシャツやタンクトップなど、ラフな薄着なのに、その原色の美しさに目を見張った。白が似合うのは当たり

前、赤、黄、オレンジなどヴィヴィッドな色彩は彼らのためにあると言っても、過言ではない。

はなはだ余談だが、イサカにいと、あまりの色バランスの悪さに、度肝を抜かれることがある。どこをどう間違えば、この色組み合わせを思いつくのか？といたくなるほど、NGで、趣味が悪い。着れば良いと思っっているからだろうが、それにしただって趣味が悪すぎだよと思う人が、信じられないことに80%以上いる。

何度も繰り返しているが、イタリアであれば、駅、郵便局、バスの中、空港など、公共の場に最低一人はイケメンがいる。そして、ほぼ99%の人がセンスというものを心得ている。目を見張るような、落ち着かない、奇抜な色の組み合わせはないし、若い人のカジュアルはそれなりのセンスを、年配の方が着る原色はそれなりの年季を感じさせるのである。

いすれにしても、アメリカで見かけるような、「げっ、趣味ワル！！」とつぶやいて、二の句が告げられなくなるような、奇抜な組み合わせは、イタリアで出くわしたことが無い。

日本にいて、すべての人が流行を追うように脅迫させるカルチャーもアンカンファタブルだが、アメリカにいて、これは馴染めん！！と思うようなセンスの悪さを、有無を言わさず受け入れさせられるのも、これまた甚だ苦痛である。

ボストンのキャリアフォーラムで一瞬気持ちが悪くなった。同じようなリクルートスーツ、同じ髪型、同じ鞆、靴の集団、同じ瞳に、無意識のうちに、拒否反応を起こしたせいだと思う。

ここアメリカでも理屈は同じ。よく、自由の国、アメリカは個性を大切にするといわれるが、個性、自分なりの価値観云々はここでは余り重視されていないような気がする。自己主張が強いということと、オリジナリティとは違うのだ。あんた何様だとおもってるの？という問いに「俺様！」と答えるテンションと、「かもめはかもめ、一人で海に行くのがお似合い」とうそぶき、一人わが道に行く、というポリシーは断然別個のものである。

さて、話をもどすと、アフリカン・アメリカン、つまり黒人以上に、何色でもおしゃれに着こなして、どんなデザインの服も一流ブランドに見せてしまう魔法の体をもっている人種はほかにいないであろう、この一言に尽きる。

私は、ソニアの愛車シビックの助手席に座り、しみじみ彼らのもつ肉体の美しさについて考えている。彼は明日の面接を控えて、ほんの少し、ナーバスになっているという。かと思えば、第二の故郷、ワシントンに戻るのにはエキサイティングだと言ってはしゃいでいる。黒人訛りと、独特のイントネーション、テノール歌手かと思うほどの、深い声の響きは誰しも聞きほれるのではないだろうか。

ああ、やはり彼らは特別な人種だと思う、アメリカ人でありながら、アメリカ人とは全く違う、彼らだけの文化を持ち、瞳の奥にサバンナの 아프리카、大草原を湛える、その肉体自体が褐色の芸術ともいえる、そんな気がしてならない。

私が時折、無意識のうちに発するイタリア語を、実に楽しそうに聞いて、「チャオベッラ」などと切り返そうとする。ちなみにこれは、英語にすれば、**Hi sweety** ぐらいのノリだろうか？(直訳の、「やあ、かわい子ちゃん」という日本語は死語だと自覚している・・)男が、女性に対してお世辞、賛美、敬意をこめて使う呼びかけである。

木曜のイサカ、日暮れの黄昏、高速に乗り、シビックのエンジンが高音をたてる。ヒャッホー！！、ワシントンだぜ！ベッラ、との彼の呼びかけに、勉強疲れも、アメリカ疲れもしばし忘れて、私はつぶやく...**Not too bad** たしかに、逃避行も悪くない。

1.2 ブラック・シンポジウム

一体全体、なぜこんなことになったのか？

ことの発端はエスラー大学、黒人サークルの集まりに参加したことである。

なぜ、このどっから見ても、あんた日本人やんけ？と言われかねない私が黒人会議に参加していたのか？日焼けしているとはいえ、黒人の黒さとは違う、シスターを気取